

サーキュラーエコノミーの実現に向けた取組事例

こじま さちよ
小島 幸代

株式会社RINNE 代表取締役

1. アップサイクルを核とした体験型サービス

株式会社RINNEは、社会課題の解決を事業目的とするソーシャルビジネス・スタートアップです。私たちは、不要なものもアイデアやデザインで付加価値が高いモノにする（以下、アップサイクルとする）を核とした体験・教育・商品開発事業を展開しています（図1）。廃材を使ったモノづくりを通じ、資源循環への社会全体の関心を高め、誰もが社会変革の主役になれる

ことを目的としています。誰もが参加できる体験型プログラムを提供し、日本発のアップサイクル×モノづくりを楽しく体験できるユニークな飲食店舗の運営も行っています。

2. 創業の背景

私はクリエイティブに特化した人事業務に16年間従事し、広告代理店や制作会社における人材育成、採用、組織構築の支援を行ってきました。そのなかで、企画部門と

事業内容

Experience 体験店舗
誰もがアップサイクルのものづくりができるRinne.bar（リンネバー）運営

Education 教育研修
環境、ソーシャルビジネス、ワークショップ設計、アート・デザイン研修

Upcycle 商品開発・サービス設計
廃材を研究し、様々なクリエイターやメーカーとマッチングしアップサイクル商品やサービスを開発

図1 株式会社RINNE 事業内容

製造現場の隔たりが大きくなり、短期間で生産されたものが短期間で廃棄される現状に疑問を感じていました。立場を超えた人々が会話し、製造過程を尊重し合うこと、共に手を動かしてクリエイティブなことに向き合う環境を作りたいと考えるようになりました。具体的にどのようにその環境を作るか模索していた時に、アメリカ・ポートランドを訪れる機会がありました。ポートランドはサステナビリティとクリエイティビティが融合した街として、注目されています。現地のライフスタイルをみると多くのヒントが得られると考えたのです。

3. モノづくりを応援しあえる環境

ポートランドでは、モノづくりをしたいという気持ちを支える様々な環境が整っていました。私が特に感銘を受けたのは公立学校の教師たちが発案したクリエイティブ・リユース・センター「SCRAP」でした（写真1）。子どもたちが使わなくなつた文房具などを寄付で受け付け、仕分けし、低価格で販売しているこの施設は、半端に残った絵具や使いかけの紙などが並び、誰でも手頃な価格で入手し、創作活動を楽しめる場となっていました。現地の子どもた



写真1 SCRAP Creative Reuse, Portland
(<https://portland.scrapcreativereuse.org/>)

ちが「宝の山だ！」と目を輝かせて素材を選び、アーティストも頻繁に訪れ、多くの地域ボランティアが運営に参加していました。街全体が地元の作り手を応援する雰囲気に満ち溢れ、資源を大切にする姿勢に深く感動しました。これらの経験から、日本にもこうした施設が必要だと強く感じました。

4. 大人が楽しくゴミの価値観を変えること

帰国後、すぐにクリエイティブ・リユース・センターの事業計画を作りましたが、周囲の反応は「子どもには良いね」という程度にとどまりました。現代人、とりわけ都市部の住民は、大量消費と大量廃棄が当たり前となり、廃材をモノづくりに活用しようという意識が薄れていることに気付きました。多くの大人は不要になったものを「ゴミ」として捨ててしまいます。小さな子どもたちは「ゴミ」の判断がつきません。大人が決めているのです。大人が変わらなければ、廃材に魅力を感じるセンターを作ることは難しいと考えました。

そこで、まずは大人が楽しめる場を提供することから始めようと考え、アップサイクルを体験できる飲食店「Rinne.bar／リ



写真2 Rinne.barでのモノづくりの様子
(<https://www.rinne.earth/>)

ンネバー」を開店しました。ここでは、レストランのメニューのようにものづくりメニューを17種類以上、提案しています。そして、素材（廃材）と道具、ドリンク（お酒も含む）を楽しみながらモノづくりに没頭できる環境を提供し、ゴミの価値観をポジティブに変えるきっかけを作っています（写真2）。



写真3 Rinne.barに送られてくる寄付素材例

5. 創業後3年で30媒体以上のメディア取材

「Rinne.bar／リンネバー」は2020年2月にオープンしました。コロナ禍にて、積極的な広報活動を行わなかったものの、3年間で32のメディアに取り上げられ、公示広告換算で約8億円に相当する注目を集めました。テレビ番組や雑誌、ウェブメディアなど、多岐にわたる媒体で紹介されることで多くの人々に私たちの事業の魅力を伝えることができました。メディアでの紹介を通じて、「使わなくなった素材を寄付したい」という声が増え、家庭で不要になった布や紙、雑貨、手芸品などが多く集まるようになりました（写真3）。寄付者の方々からは、「自分が捨てるつもりだったものが、他の誰かの手によって生まれ変わることに感動する、ありがとう」といった声も多く寄せられています。感謝をされる反応を当初は意外に感じていましたが、その反応が増えていくなかで、私たちの取組みが単なるリサイクル活動ではなく、人々の思い出や感情を次の世代へとつなぐ役割を果たしているのだと気づきました。私たちの活動を通じて、物を媒介に

人々がつながり、新たな価値を共創できる場が生まれていることに大きなやりがいを感じています。

6. サーキュラーエコノミー実現に向けた社会実装化事業の採択

アップサイクルを体験できる飲食店「Rinne.bar／リンネバー」のほかに、私たちの活動はクリエイティブな発想で廃材を活用し、人々の意識を変える研修事業やサービスデザインに力を注いでいます。企業、教育機関、国連開発計画（UNDP）からも評価をいただき、ワークショップや教育プログラムを開発、提供し、年齢や国籍も様々な層の参加者に体験いただくことができています。1つ事例をあげると、昨今のSDGs教育の高まりにより、教育機関からプラスチックのリユースワークショップの要望が増えたことで、行なったワークショップ事業があります。この取組みは、東京都の「サーキュラーエコノミーの実現に向けた社会実装化事業」の令和5年度採択事業者に選定されました。

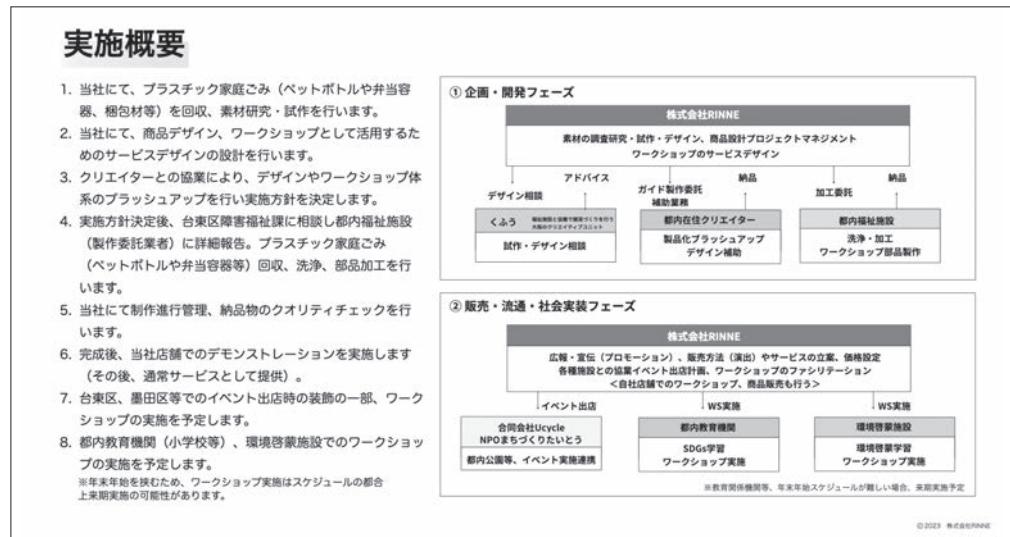


図2 身近なプラスチック家庭ごみを再利用するワークショップ事業開発実施概要



図3 株式会社RINNE サービス・商品試作

7. 身近なプラスチック家庭ごみを再利用するワークショップ事業開発

この採択された事業は、プラスチック家庭ごみを再利用するアップサイクルキットを開発し、地域のイベントや教育機関でワークショップを実施する約4ヶ月の事業開発です。「企画・開発フェーズ」と「販売・

社会実装フェーズ」のプロセスは図2を参照ください。

(1) 企画・開発フェーズ

当社にて、プラスチック家庭ごみ（ペットボトルや弁当容器等）を回収、素材研究・試作を行った後に福祉施設との協働で素材加工のデモンストレーションを実施。実際の製作工程を確認しながら納品物のクオリティチェックを行いました。さらに、デザ

イン性の高い製品を生み出すために、クリエイターやデザイナーとのコラボレーションも積極的に行います。これにより、アップサイクル製品の可能性を広げ、一般消費者にも受け入れられる商品開発となります(図3)。

(2) 販売・流通・社会実装フェーズ

都内の地域イベント、教育機関でのワークショップの実施(写真4～6)。また、引き続き自社店舗で事業成果として開発した製品のワークショップを通常サービスとして実施し続けることができるとともに、プラスチックのリユース・リサイクル関連の教育プログラムや企業のSDGs研修プログラムとして提案できる内容になります。

8. 事業の成果

事業開発において様々な協力会社、地域との連携を通じて開発された商品、サービスは、社会実装の段階で、まちづくり活動やイベント、学校や教育現場、さらには環境啓蒙施設で販売や体験が行われることになりました。また「Rinne.bar／リンネバー」ではアップサイクル体験ができる日常的なサービスとして、提供しています。

最終的には、この取組みを通じて、生活者が資源循環の価値を感じ、行動変容を促進しています。これにより、「自分ごと化」を進め、無関心な層にも影響を与え、持続可能な社会づくりに寄与しています(図4)。

9. 未来の展望

我々の事業は、アップサイクルを体験できる飲食サービスにとどまらず、地域のイベントや学校での研修事業、企業と連携した商品開発を通じて、人々の生活様式を見直し、循環社会への行動変容を支援しています。廃棄または不要とされた素材を使っ



写真4 まちカレ祭り2023 (東京都台東区)

台東区主催のまちづくりイベントでプラスチックアップサイクルのワークショップを実施し、地域住民との交流を深めました。



写真5 芝浦工業大学附属中学高等学校
(東京都江東区)

中学生・高校生を対象に、プラスチック問題について考えるワークショップを提供し、次世代への教育に貢献しました



写真6 新渡戸文化小学校 (東京都中野区)

小学2年生を対象に、アップサイクルキットを活用したワークショップを実施し、子どもたちの創造力を育みました。

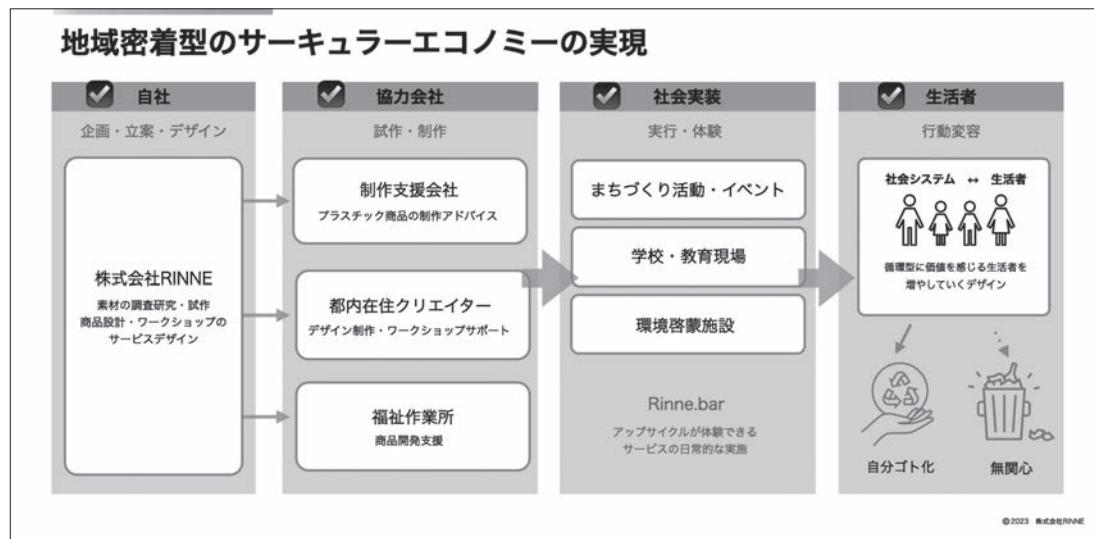


図4 事業の成果

たモノづくりを通じ、資源循環への社会全体の関心を高め、この取組みは、社会全体からの支持を受けながら、さらに広がりを見せてています。次のステップとして私たちは持続可能な社会の実現に向けて、企業や家庭から不要とされるものを持ち寄って再利用する「クリエイティブ・リユース・センター」を作りたいと考えています。ゴミだと思われていたものが、実は誰かの宝物となる可能性を秘めたこのセンターは、人々の創造力を刺激し、資源を循環させるだけでなく、持続可能なコミュニティを育む拠点となるでしょう。

また、「もったいない」という日本独自

の概念を世界に発信し、グローバルなサーキュラーエコノミーの推進にも寄与したいと考えています。国際的なネットワークを構築し、他のクリエイティブ・リユース・センターとも連携することで、持続可能な未来を共に創造していきたいと思います。

私たちRINNEの取組みは、サーキュラーエコノミーの実現に向けた1つの試みとして、環境保護、社会的包摂、経済的持続性を統合し、地域が主体となったビジネスモデルの可能性を示しています。今後も、多くの方々と力を合わせ、持続可能な社会の実現に向けて努力を続けてまいります。